



TITLE:

量子ホール効果: その意義と幾何学
的および代数的構造(量子ホール効
果,第46回物性若手夏の学校(2001年
度)(その1),講義ノート)

AUTHOR(S):

初貝, 安弘

CITATION:

初貝, 安弘. 量子ホール効果: その意義と幾何学
的および代数的構造(量子ホール効果,第
46回物性若手夏の学校(2001年度)(その1),講義ノート). 物性研究 2002, 77(4): 684-712

ISSUE DATE:

2002-01-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/97158>

RIGHT:

－ 量子ホール効果 －

その意義と幾何学のおよび代数的構造

東京大学大学院工学系研究科 物理工学 初貝 安弘¹

目次

| | | |
|-------|--|-----|
| 1 | はじめに | 684 |
| 2 | 量子ホール効果と磁場中の電子系 | 685 |
| 2.1 | 量子ホール効果とは | 685 |
| 2.2 | 磁場中の電子系 | 685 |
| 2.3 | 格子磁場下の電子系 | 685 |
| 3 | ホール伝導度とそのトポロジカルな意義 | 691 |
| 3.1 | 無限系 (バルク) におけるホール伝導度のトポロジカルな意味— 渦度、チャーン数 — | 691 |
| 3.1.1 | 断熱近似による TKNN 公式の導出 | 692 |
| 3.1.2 | チャーン数と渦度、ディラックモノポールとのアナロジー | 695 |
| 3.2 | 境界のある系でのゲージ不変性による Laughlin の議論 | 698 |
| 3.3 | 境界を持つ系におけるホール伝導度のトポロジカルな意味— リーマン面上でのエッジ状態の回転数と交点数 — [18] | 699 |
| 3.3.1 | 転送行列とエッジ状態 | 700 |
| 3.3.2 | 転送行列とバルク状態 | 702 |
| 3.3.3 | リーマン面上のエッジ状態 | 705 |
| 3.3.4 | リーマン面上の回転数、交点数と Laughlin の議論 | 706 |
| 3.4 | 2つの位相不変量: — バルクかエッジか — | 709 |
| 4 | 分数と整数 | |
| 4.1 | Berry Phase | |
| 4.2 | 分数統計粒子 | |
| 4.3 | 磁束の切り張り (Composite Fermion, 1/2 Fermi Liquid 状態, Anyon 超伝導...) | |
| 4.4 | もう一つの分数統計, 排他的分数統計 | |
| 5 | 量子相転移と Dirac Fermion | |
| 5.1 | 量子相転移と (隠れた) ディラックフェルミオン | |
| 5.2 | ランダム系における位相不変量の意義、ゼロモード、非局在状態のフローティング等、最近の話題 | |
| 5.3 | 時間反転対称性を破る超伝導とスピンホール伝導度の量子化、束縛状態、双対性 | |
| 6 | 磁場中の電子系における幾何学的位相と量子群 | |
| 6.1 | イントロダクション | |
| 6.2 | 量子群といくつかの表現 | |
| 6.3 | ブロッホ電子に対するベーテ方程式 | |
| 6.4 | ベーテ方程式のあらわな解 | |
| 7 | 終わりに | |

1 はじめに

量子ホール効果に関してはその現象の発見に対して Klitzing(1982 年) にノーベル賞が与えられ [1]、この現象において存在すると考えられている分数電荷の発見に対して Tsui, Störmer, Laughlin (1998 年) に再びノーベル賞が与えられています。賞による評価がすべてというわけでは当然ありませんが、この現象の現在の物性物理における意義の大きさをある程度、象徴しているといえるで

¹ hatsugai@pothos.t.u-tokyo.ac.jp, <http://pothos.t.u-tokyo.ac.jp/summer school/> v1.01 最終変更 2001. 5.9

しょう。量子ホール効果は磁場中の2次元電子系でおきる現象です。この系においては後で述べます幾何学的位相とよばれる量子力学的な位相が本質的な役割を果たします。また、分数量子ホール効果は運動エネルギーに比べて電子間の相互作用エネルギーが極めて大きいいわゆる強相関の問題の典型例です。振り返ると量子ホール効果は現在の物性物理の重要な問題である「幾何学的位相」と「強相関効果」の主な舞台であり、事実ここで得られた手法は他の問題へ適用され新しい知見を産みつつあるわけです。

この現象を中心としてその固体物理における重要性が理解できるような講義をしたいと思います。また量子ホール効果の舞台となる磁場中の2次元電子系は講義で議論するように現代的な幾何学的、数学的構造、代数的構造を含んでおりその面からも極めて興味深い対象となっています。この数学的な構造についても理解して頂ける講義としたいと思います。電子系の基本的かつ普遍的現象としての量子ホール効果に関連して、しっかりわかってきたこと及びその研究の過程で生まれてきたアイデアをできるだけ自己完結する見方でお話したいとおもいます。特に量子ホール効果については「通常の固体物理的側面」からの解説はすでに多く存在するのでできるだけ特徴あるものとなればと考えています。

脚注番号がついている部分については導出その他の部分で講義では説明する予定です。自分で埋めてみてください。また参考文献は最低限のものを多少の参考となることを期待してのせています。原論文で引用しているようにここでの議論は多くの人々の結果によるところが多であることはいうまでもありません。ここで関係の方々に感謝したいとおもいます。ただし時間の関係で参考文献リストは最小限かつランダムなものとなっていることを了解していただきたいとおもいます。

紙面の制限で以下所々及びある部分より残りを省略するので詳しくは、「2001年度夏の学校」講義録、もしくは初貝ホームページ(<http://pothos.t.u-tokyo.ac.jp/hatsugai/>)内の講義のページを参照されたい。なおWeb上では機会を見つけてより詳しいものとしていく予定です。

2 量子ホール効果と磁場中の電子系

2.1 量子ホール効果とは

量子ホール効果 [1, 2, 3, 4, 5, 6] とは文字どおりホール伝導度が量子化される現象でその実験的発見に対して K.V.Klitzing にノーベル賞があたえられています。驚くべきはその精度でそれが6桁以上の精度を持つというのです。伝導度ですから電流/電圧なわけで電流と電圧をはかって例えば $34.51231 / 17.25616 = 1.999999\dots$ 、 $67.88631 / 22.62876 = 3.000001$ となったら「これは普通でないなんかがある」、というわけです。こんなぐあいに整数の値にホール伝導度が極めて近くなる現象を 整数量子ホール効果といい、ある場合には、この値が $14.512 / 43.535 = 0.3333\dots$ 等と整数/奇数に極めて近くなるときを分数量子ホール効果といいます。この現象の特異なところは、結果がとてもきれいな数になるので一見して何かの物理量を摂動論とか $\circ\times$ 近似で計算するという定量的な議論では不十分だと感じるわけです。つまりこの現象は、何らかの形で整数がらみの理論がその裏にあることを示唆していると思いませんか。そして実際、量子ホール効果とは系の細部に依存しない境界が何個あるか、どんなぐあいに繋がっているかといった物理系の位相的性質にのみ依存した形で理論としてきれいにまとまり、それが ある意味で現実にも実験として観測にかかっている (と信じられている) 非常にまれな現象なのです。

2.2 磁場中の電子系

この節は標準的かつ基本的なので紙面の関係で省略する。「2001年度夏の学校」講義録、もしくは初貝ホームページ(<http://pothos.t.u-tokyo.ac.jp/hatsugai/>)内の講義のページを参照

2.3 格子上磁場下の電子系

次に格子間隔を a とした格子上で磁場中の電子系を議論したい。[12, 13, 14, 15, ?, 18] 以下わかるようにこのように格子上で議論を行うことにより境界条件、状態の数え上げ等が簡単になる。また通常の連続空間での議論も適当なスケール極限 ($a \rightarrow 0$) の下で再現する [21]。

まず、第二量子化した表示で次のハミルトニアンを考える。

$$H = -t \sum_{\langle ij \rangle} (c_i^\dagger e^{i\theta_{ij}} c_j + h.c.) + V(\{n_k\})$$

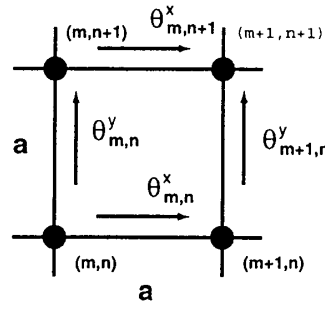


図 1: リンクに割り当てる位相とプラケットあたりの磁束

ここで c_i は 2 次元格子上 i サイトの電子の消滅演算子で ($\{c_i, c_j^\dagger\} = \delta_{ij}$)、 V は電子の粒子数 (演算子) $n_k = c_k^\dagger c_k$ により書ける項で乱れのポテンシャル及び、電子間相互作用はこの項に含まれるが、以下当面のところ相互作用も乱れもない $V = 0$ の場合を考えよう。 θ_{ij} は j サイトから i サイトに電子が飛び移るとき受ける位相の変化でベクトルポテンシャル $\vec{A}(\vec{r})$ と次のように関係するものとする。

$$\theta_{ij} = -\frac{e}{c\hbar} \int_{\vec{r}_i}^{\vec{r}_j} d\vec{r} \vec{A}(\vec{r}) = -2\pi \frac{1}{\Phi_0} \int_{\vec{r}_i}^{\vec{r}_j} d\vec{r} \vec{A}(\vec{r}), \quad \Phi_0 = \frac{hc}{e}$$

なお Φ_0 は磁束単位と呼ばれる。これが磁気並進演算子 T_x, T_y を使って以下のように書けることにまず注意しよう。

$$\begin{aligned} H &= H_0 + V \\ H_0 &= -t(T_x + T_x^\dagger + T_y + T_y^\dagger) \\ T_x &= \sum_{m,n} c_{m+1,n}^\dagger e^{i\theta_{m,n}^x} c_{m,n} \\ T_y &= \sum_{m,n} c_{m,n+1}^\dagger e^{i\theta_{m,n}^y} c_{m,n} \end{aligned}$$

特に位相を図 1 のようにとった場合

$$\begin{aligned} \theta_{m,n}^x &= \frac{e}{c\hbar} a A_x(m + \frac{1}{2}, n) + o(a) \\ \theta_{m,n}^y &= \frac{e}{c\hbar} a A_y(m, n + \frac{1}{2}) + o(a) \end{aligned}$$

となり

$$\sum_{\text{Plaquette } P=(m+\frac{1}{2}, n+\frac{1}{2})} \theta = \theta_{m,n}^x + \theta_{m+1,n}^y - \theta_{m,n+1}^x - \theta_{m,n}^y = 2\pi \phi_P$$

と定めると a について展開して a について最低次で

$$\phi_P = -\frac{e}{2\pi c\hbar} a^2 (\partial_x A_y - \partial_y A_x) = -\frac{Ba^2}{\Phi_0}$$

となる。これから物理量 ϕ_P はプラケット P での xy 2 次元平面に垂直な磁束を磁束量子 Φ_0 を単位として計ったものと考えよう ($\vec{B} = \text{rot } \vec{A}$)。

この格子上の系は $\{\varphi_i\}$ を任意として次のようなユニタリ変換 (局所ゲージ変換) で不変であることに注意しよう。

$$\begin{aligned} c_i &\rightarrow c_i' = c_i e^{i\varphi_i}, & \{c_i', c_j'^\dagger\} &= \delta_{ij} \\ \theta_{ij} &\rightarrow \theta_{ij}' = \theta_{ij} + \varphi_i - \varphi_j \\ H(\{c_i, \theta_{ij}\}) &= H(\{c_i', \theta_{ij}'\}) \end{aligned}$$

ただし各位相 θ_{ij} そのものには不定性があるが、 ϕ_P は確定する。またこれがユニタリ変換であることから観測量はすべて不変である。

次にこの格子系の一粒子のシュレディンガー方程式 $H|E\rangle = E|E\rangle$, $|E\rangle = \sum_{m,n} \psi_{m,n} c_{m,n}^\dagger |0\rangle$ を考えると ($V=0$ の時)

$$-t(e^{i\theta_{m-1,n}^x} \psi_{m-1,n} + e^{-i\theta_{m,n}^x} \psi_{m+1,n} + e^{i\theta_{m,n-1}^y} \psi_{m,n-1} + e^{-i\theta_{m,n}^y} \psi_{m,n+1}) = E\psi_{m,n}$$

となりこの波動関数についても

$$\psi_{m,n} = \psi(\vec{r}) = \psi(ma, na)$$

として a について 2 次まで展開すると

$$-\frac{1}{2m} \left(\frac{\hbar}{i} \vec{\nabla} + \frac{e}{c} \vec{A} \right)^2 \psi(\vec{r}) = \epsilon \psi(\vec{r})$$

と連続空間における 磁場中のシュレディンガー方程式が得られる。ただしここで $\epsilon = \frac{\hbar^2}{2mta^2} (E - 4t)$ である (確認せよ)。

ここでこの系の一粒子エネルギーを計算してみよう。まず、位相の選び方つまり、ゲージとしてランダウゲージ

$$\theta_{m,n}^x = 0, \theta_{m,n}^y = 2\pi\phi m$$

をとり、 ϕ として $\phi = \frac{p}{q}$, p, q は互いに素な整数としよう。さらに境界条件としては $L_x \times L_y$ の系で周期的境界条件をとる。

ここでこのゲージでは x 方向に周期は q であることから運動量空間の演算子 $\bar{c}_1(K_x, k_y), \dots, \bar{c}_q(K_x, k_y)$ を次のように導入する。(L_x は q で割り切れるとしよう。)

$$\begin{aligned} c_{m,n} &= c_{qm'+m'',n} = \frac{1}{\sqrt{L_x/q}} \frac{1}{\sqrt{L_y}} \sum_{K_x, k_y} e^{iK_x m' + ik_y n} \bar{c}_{m''}(K_x, k_y) \\ m &= qm' + m'', \quad m' = 1, \dots, L_x/q, \quad m'' = 1, \dots, q \\ K_x &= 2\pi \frac{n_x}{L_x/q}, \quad n_x = 1, \dots, L_x/q \\ k_y &= 2\pi \frac{n_y}{L_y}, \quad n_y = 1, \dots, L_y \end{aligned}$$

ここで $\bar{c}_i(K_x, k_y)$ は $\{\bar{c}_i(K_x, k_y), \bar{c}_j^\dagger(K'_x, k'_y)\} = \delta_{n_x, n'_x} \delta_{n_y, n'_y}$ 等を満たすフェルミ演算子であり、 $K_x \in [0, 2\pi]$, $k_y \in [0, 2\pi]$, $\Delta K_x = \frac{2\pi}{L_x/q}$, $\Delta k_y = \frac{2\pi}{L_y}$ である。ここで $K_x = qk_x$ とし ($\Delta k_x = \frac{2\pi}{L_x}$)、 $c_j(k_x, k_y) = \bar{c}_j(qk_x, k_y)$ とすると x 方向のとりうる波数は

$$k_x \in [0, \frac{2\pi}{q}], \quad k_y \in [0, 2\pi]$$

であり、ブリルアンゾーンが $1/q$ になっている。これはゲージを固定する際に実空間の周期が q 倍になったことを反映しており、磁氣的ブリルアンゾーンと呼ばれる。なおフェルミ演算子の周期は N, M を任意の整数として

$$c_j(k_x + N\frac{2\pi}{q}, k_y + M2\pi) = c_j(k_x, k_y)$$

であり、磁氣的ブリルアンゾーン上 x, y 各方向に 0 と $2\pi/q$, 0 と 2π を同一視するわけで磁氣的ブリルアンゾーンはトーラス T_{MBZ} と見なせることに注意しよう。このとき並進演算子は

$$c(\vec{k}) = \begin{pmatrix} c_1(\vec{k}) \\ \vdots \\ c_q(\vec{k}) \end{pmatrix}$$

をもちいて

$$\begin{aligned}
 T_x &= \sum_{k_x, k_y} c^\dagger(\vec{k}) \begin{pmatrix} 0 & & e^{-iqk_x} \\ 1 & 0 & \\ & \ddots & \ddots \\ & & 1 & 0 \end{pmatrix} c(\vec{k}) \\
 &= L_x L_y \int_{T_{MBZ}} \frac{d^2 k}{(2\pi)^2} c^\dagger(\vec{k}) \begin{pmatrix} 0 & & e^{-iqk_x} \\ 1 & 0 & \\ & \ddots & \ddots \\ & & 1 & 0 \end{pmatrix} c(\vec{k}) \\
 T_y &= \sum_{k_x, k_y} c^\dagger(\vec{k}) e^{-ik_y} \text{diag}(e^{i2\pi\phi}, \dots, e^{i2q\pi\phi}) c(\vec{k}) \\
 &= L_x L_y \int_{T_{MBZ}} \frac{d^2 k}{(2\pi)^2} c^\dagger(\vec{k}) e^{-ik_y} \text{diag}(e^{i2\pi\phi}, \dots, e^{i2q\pi\phi}) c(\vec{k})
 \end{aligned}$$

¹ となる。よってハミルトニアンは

$$\begin{aligned}
 H &= (-t) L_x L_y \int_{T_{MBZ}} \frac{d^2 k}{(2\pi)^2} c^\dagger(\vec{k}) H_0(\vec{k}) c(\vec{k}) \\
 H_0(\vec{k}) &= \begin{pmatrix} 2 \cos(k_y - 2\pi\phi) & 1 & 0 & \dots & e^{-iqk_x} \\ 1 & 2 \cos(k_y - 4\pi\phi) & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 2 \cos(k_y - 6\pi\phi) & 1 & \vdots \\ 0 & \ddots & \dots & \dots & \vdots \\ e^{iqk_x} & 0 & \dots & 1 & 2 \cos(k_y - 2\pi q\phi) \end{pmatrix}
 \end{aligned}$$

となる。

以下詳しく議論する前に基本的な事実を確認しておこう。まず、ハミルトニアンがフェルミ演算子について2次形式であることから、1粒子固有状態はバンドインデックス $\ell = 1, \dots, q$ を持つブロッホ関数 $|\psi^\ell(\vec{k})\rangle$ で与えられる。

$$\begin{aligned}
 H|\psi^\ell(\vec{k})\rangle &= E^\ell(\vec{k})|\psi^\ell(\vec{k})\rangle \\
 |\psi^\ell(\vec{k})\rangle &= \sum_j c_j^\dagger \psi_j^\ell |0\rangle \\
 \psi^\dagger(\vec{k}) H_0(\vec{k}) \psi(\vec{k}) &= \text{diag}(E^1(\vec{k}), \dots, E^q(\vec{k}))
 \end{aligned}$$

ここで各バンドごとの規格化されたブロッホ関数を列ベクトルとしてならべた係数行列 $\psi = (\psi^1, \dots, \psi^q)$ はユニタリである。

まず特定のフラックスに対してエネルギーバンドを書いてみよう。図参照。

さらにこの系のスペクトル $E^b(\vec{k})$ を ϕ を変えながら図示したものがフラクタル構造として有名な Hofstadter のバタフライである。(図 2) [12, 13, 14, 15]

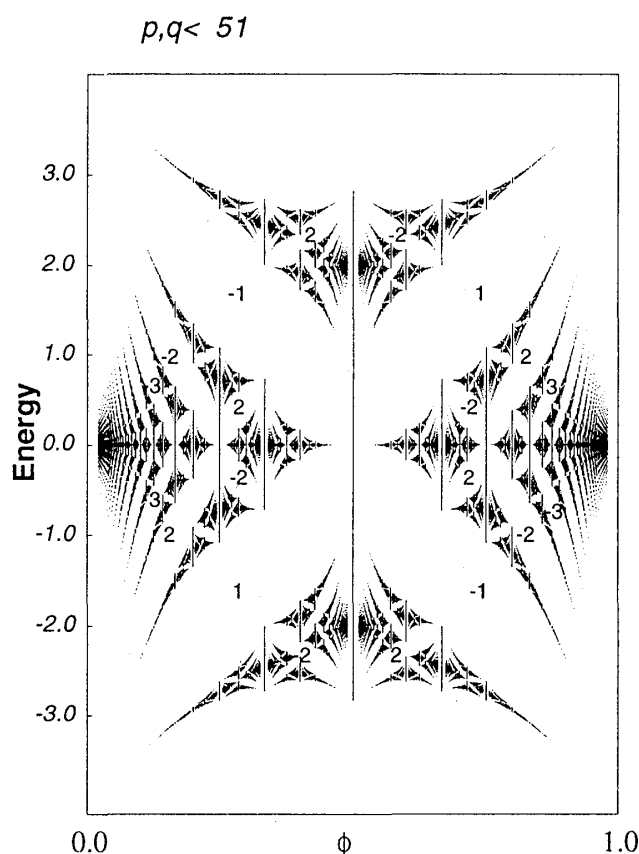


図 2: 格子上磁場中のフェルミ粒子系の一粒子エネルギー: Hofstadter のバタフライ。図中の整数はフェルミエネルギーがそのエネルギーギャップにある時のホール伝導度 (e^2/h を単位として) である。[16]

このスペクトルの特徴はハミルトニアンからわかるように $\phi = \frac{p}{q}$ (p, q 整数) のときエネルギーバンドが q 個に分かれていることにあり、見ての通り至る所に入れ子構造がありフラクタルとなっている。[13]²

最初に一様磁場 \vec{B} 中の粒子の量子力学について復習しよう [10]。

まず、古典的なローレンツ力に従う電子 (電荷 $-e$) のニュートン方程式を導くハミルトニアンが次のものであることに注意して

$$H = \frac{1}{2m} \left(\vec{p} + \frac{e}{c} \vec{A} \right)^2$$

(量子力学における) ハミルトニアンとしてつぎのものをとろう。

$$\begin{aligned} H &= \frac{1}{2m} \vec{\Pi}^2 \\ \vec{\Pi} &= -i\hbar \vec{\nabla} + \frac{e}{c} \vec{A} \\ \vec{B} &= \text{rot } \vec{A} \end{aligned}$$

ここで磁場を z 方向にとって

$$H = \frac{1}{2m} (\hat{z} \times \vec{\Pi})^2 = \frac{1}{2m} (\Pi_x^2 + \Pi_y^2)$$

とする。³ ここで $\vec{\Pi}$ の成分間の交換子を計算すると⁴

$$\left[\frac{\ell_B}{\hbar} \Pi_x, \frac{\ell_B}{\hbar} \Pi_y \right] = -i$$

ここで

$$\ell_B = \sqrt{\frac{\hbar c}{eB}}$$

は長さの次元を持つ量で磁気長と呼ばれる。この交換関係より

$$a = \frac{1}{\sqrt{2}} \frac{\ell_B}{\hbar} (\Pi_y + i\Pi_x)$$

として演算子 a を定義すれば $[a, a^\dagger] = 1$ であり、⁵ ハミルトニアンは⁶

$$H = \hbar\omega_c \left(n_a + \frac{1}{2}\right), \quad n_a = a^\dagger a$$

$$\omega_c = \frac{eB}{mc} : \text{サイクロトロン周波数}$$

と書ける。これは1つの調和振動子のハミルトニアンである。
一方

$$R_x = x - \frac{\ell^2}{\hbar} \Pi_y$$

$$R_y = y + \frac{\ell^2}{\hbar} \Pi_x$$

を定義するとこれらはハミルトニアンと可換であり⁷

$$[H, R_x] = [H, R_y] = 0$$

運動の定数となる。⁸

よって観測量となるエルミート演算子 R_x または R_y がハミルトニアンと可換となり、一つのエネルギー状態は異なる量子数を持つことを意味する。すなわち各エネルギーは縮退していることとなる。この縮退をランダウ縮退という。(特に系の大きさが ℓ_B を単位にマクロな系ではこの縮退度はマクロなものとなる。)

さらに磁気並進演算子 $T(\vec{\lambda})$ を

$$T_x(\vec{\lambda}) = e^{\frac{i}{\hbar} \vec{\lambda} \cdot \vec{\Pi}}$$

とすれば⁹

$$T(a\hat{x})^{-1} T(b\hat{y})^{-1} T(a\hat{x}) T(b\hat{y}) = e^{2\pi \frac{\text{囲む面積} \times B}{\Phi_0}}$$

すなわち並進操作により閉じた曲線を動くときに得る位相は囲む面積あたりの磁束を磁束単位で計ったもの ($\times 2\pi$) となることに注意しておこう [11]。

以下有名な2つのゲージについて少し議論しよう。

- ランダウゲージ

$$\vec{A} = B(0, x, 0)$$

としよう。このとき最低エネルギー状態状態 (最低ランダウ準位) は $a|\psi\rangle = 0$ を満たすから¹⁰

$$\psi(x, y) = e^{-ik_y y - \frac{(x - \ell_B^2 k_y)^2}{2\ell_B^2}}$$

$$R_y \psi = \ell_B^2 k_y \psi$$

となり、異なる

$$R_y b = \ell_B^2 k_y$$

の状態が縮退した状態を与えることとなる。これらは x 方向には $\ell_B^2 k_y$ に局在した波動関数となる。ここで全系が $L_x \times L_y$ の有限系とし、 y 方向には周期的であり、 x 方向には $0 < R_y < L_x$ のもののみ許されるとすればその縮退度 N_ϕ は

$$\begin{aligned} N_\phi &= \frac{k_y^{\max}}{\Delta k_y} = \frac{L_x / \ell_B^2}{2\pi / L_y} \\ &= \frac{L_x L_y}{2\pi \ell_B^2} = \frac{L_x L_y}{2\pi \frac{\hbar c}{eB}} \\ &= \frac{BS}{\Phi_0} \end{aligned}$$

となる。ここで $S = L_x L_y$ は全面積

$$\Phi_0 = \frac{\hbar c}{e}$$

は磁束単位とよばれる。すなわちランダウ準位の縮退度は系を貫く全磁束を磁束単位で計ったものとなる。

- 対称ゲージ

$$\vec{A} = \frac{1}{2}B(-y, x, 0)$$

とすると¹¹ $a|\psi\rangle = (\Pi_y + i\Pi_x)|\psi\rangle = 0$ より $(\partial_{\bar{z}} + \frac{z}{4e\ell_B^2})\psi = 0$ から

$$\psi(z, \bar{z}) = P(z) e^{-\frac{|z|^2}{4\ell_B^2}}$$

となり $P(z)$ の選び方でランダウ縮退が生じる。¹²

3 ホール伝導度とそのトポロジカルな意義

量子ホール効果は占有率 ν が特定の有理数 $\nu = p/q$ (q 奇数) のときのホール伝導度が $\sigma_{xy} = \nu \frac{e^2}{h}$ となり、 ν を変えて実験したとき小さい q のところに平らな部分(プラトー)が現れるというものであり、 $\sigma_{xy} = \nu \frac{e^2}{h}$ という表式自体は乱れのない連続系の場合容易にしめせるものでそれほどおどろくべきものではない。驚くべきは ν を上記のマジックナンバーの近傍で変化させても σ_{xy} は変化せずプラトーをつくるという点にあり、乱れの効果の議論も本質的に重要である。ただここではそれには触れず、 $\sigma_{xy} = \nu \frac{e^2}{h}$ が $\nu =$ 整数の場合、ある種の位相幾何学的量として書き直せることを紹介したい。

なぜ物理量を不変量で書こうとするのか、その気持ちだけをここで述べよう。ある物理量が本質的に離散的な量(たとえば何かの個数)で書けたとするとすると乱れの強さ、相互作用等を連続に変化させても離散量の方は連続に変化することはできない。唯一許される連続変化は変化しないこと、というわけである。¹³

なおここでは ν が整数の場合に限って議論し ν が分数の場合は後でこの場合に帰着させることを試みる [24]。

3.1 無限系(バルク)におけるホール伝導度のトポロジカルな意味——渦度、チャーン数——

無限系の場合にホール伝導度を久保公式から書き直すことは有名な TKNN の論文でおこなわれた。[16]¹⁴ その結果をまず述べよう。

フェルミエネルギーが下から j 番目のエネルギーギャップにある時のホール伝導度 $\sigma_{xy}^{\text{bulk}}$ はフェルミエネルギー以下のエネルギーバンドのホール伝導度 σ_{xy}^{ℓ} の和として次のようになる。

TKNN formula

$$\begin{aligned}\sigma_{xy}^{\text{bulk}} &= \sum_{\ell=1}^j \sigma_{xy}^{\ell} \\ \sigma_{xy}^{\ell} &= -\frac{e^2}{h} \frac{1}{2\pi i} \int \int_{T_{MBZ}^2} dk_x dk_y \hat{z} \cdot \vec{B}^{\ell} \\ \vec{B}^{\ell} &= \text{rot } \vec{A}^{\ell} \\ \vec{A}^{\ell} &= \langle \psi^{\ell} | \vec{\nabla}_k \psi^{\ell} \rangle \\ &= \sum_j \psi_j^{\ell}(\vec{k}) \vec{\nabla} \psi_j^{\ell}(\vec{k})\end{aligned}$$

ここで $\psi^{\ell}(\vec{k})$ は下から ℓ 番目のバンドの規格化されたブロッホ関数である。

この表式の意味は次節以降で説明するが、チャーン数と呼ばれる位相幾何学的な意味を持つ特徴的な整数であることを注意しておく。[16, 17, 4, 23, 18, 19]

3.1.1 断熱近似による TKNN 公式の導出

ホール伝導度を議論するために磁場に加えてさらに x 方向に電場 E_x をかけ y 方向の電流を計算してみよう。まず Maxwell の方程式よりスカラーポテンシャルがない場合 $E_x = -\frac{1}{c} \frac{\partial A_x}{\partial t}$ であることより、電場の効果を時間に依存するハミルトニアンとして取り込むことを考える。さらに(便宜上)パラメーター Φ を含む形にハミルトニアンを拡張しておく。これはいわゆるアハロノフ・ボーム磁束に対応する。このときのハミルトニアンは次の形をとる。(波数の和は磁気ブリルアンゾーン $0 \leq k_x \leq 2\pi/q, 0 \leq k_y \leq 2\pi$ の上でとる。以下これを常に仮定する。 $\int_{T_{MBZ}} \frac{d^2 k}{(2\pi)^2}$)

$$\begin{aligned}H(t, \Phi) &= T_x e^{-i2\pi \frac{acE_x}{\Phi_0} t} + T_y e^{i2\pi \frac{\Phi}{\Phi_0} \frac{1}{L_y}} + h.c. \\ &= \int_{T_{MBZ}} \frac{d^2 k}{(2\pi)^2} \tilde{H}(t, \Phi, \vec{k}) \\ &= \int_{T_{MBZ}} \frac{d^2 k}{(2\pi)^2} c^{\dagger}(\vec{k}) H(t, \Phi, \vec{k}) c(\vec{k}) \\ H(t, \Phi, \vec{k}) &= H_0(k_x + 2\pi \frac{acE_x}{\Phi_0} t, k_y - 2\pi \frac{\Phi}{\Phi_0} \frac{1}{L_y})\end{aligned}$$

ここで y 方向の全電流演算子 I_y を次のように書こう。(Byers-Yang の公式とよばれる。)

$$I_y = \frac{e}{h} i(T_y - T_y^{\dagger}) = c \frac{\partial H}{\partial \Phi} \Big|_{\Phi=0} = c \partial_{\Phi} H(t, \Phi) \Big|_{\Phi=0}$$

以下断熱近似の範囲で時間に依存する摂動論により y 方向の電流(電流演算子の期待値)を電場の効果を最低次まで計算する。

まず次の事実から確認しよう。一般に時間に依存するハミルトニアン $H(t)$ の基底状態 $|G(t)\rangle$ はスナップショットハミルトニアンの規格直交化された固有状態 $|\alpha(t)\rangle$

$$H(t)|\alpha(t)\rangle = E_{\alpha}|\alpha(t)\rangle, \quad E_g \leq E_{\alpha}$$

を用いて

$$|\langle a_{\alpha} | \dot{g} \rangle| << |E_g - E_{\alpha}|, \quad \alpha \neq g$$

の範囲で

$$|G(t)\rangle = e^{i\gamma} e^{\frac{1}{i\hbar} \int_0^t dt' E_g} \left(|g\rangle + i\hbar \sum_{\alpha \neq g} |\alpha\rangle \frac{\langle \alpha | \partial_t g \rangle}{E_\alpha - E_g} \right)$$

$$i\gamma = - \int_0^t dt' \langle g | \dot{g} \rangle$$

となる。¹⁵

まず1粒子ハミルトニアンを対角化するユニタリ行列 ψ を求めておく。

$$\begin{aligned} \psi^\dagger(\vec{k}) \mathbf{H}(\vec{k}) \psi(\vec{k}) &= \text{diag}(E^1(\vec{k}), \dots, E^q(\vec{k})) \\ \mathbf{H}(\vec{k}) \psi^\ell(\vec{k}) &= E^\ell(\vec{k}) \psi^\ell(\vec{k}) \\ \psi(\vec{k}) &= (\psi^1(\vec{k}), \dots, \psi^q(\vec{k})) \end{aligned}$$

これよりスナップショットの固有状態は一体の状態として (シングルスレーター行列式) 次のようにとれる。¹⁶

$$\begin{aligned} H(t, \Phi) |\alpha(t, \Phi)\rangle &= E_\alpha(t, \Phi) |\alpha(t, \Phi)\rangle \\ |\alpha(t, \Phi)\rangle &= \prod_{\vec{k}, \ell} \sum_j c_j^\dagger \psi_j^\ell(\vec{k}, t, \Phi) |0\rangle \\ c_j^\dagger &= c_j^\dagger(k_x, k_y) \\ H(t, \Phi, \vec{k}) \psi^\ell(t, \Phi, \vec{k}) &= H_0(k_x + 2\pi \frac{acE_x}{\Phi_0} t, k_y - 2\pi \frac{\Phi}{\Phi_0} \frac{1}{L_y}) \psi^\ell(t, \Phi, \vec{k}) \\ &= E_0^\ell(t, \Phi, \vec{k}) \psi^\ell(t, \Phi, \vec{k}) \end{aligned}$$

を満たすことに注意する。例えば基底状態は波数 \vec{k} 及びバンドインデックス ℓ を $E^\ell(\vec{k}) \leq E_F$ を満たすように選ぶ。また特に最後の式より

$$\begin{aligned} \psi^\ell(t, \Phi, \vec{k}) &= \psi_0^\ell(k_x + 2\pi \frac{acE_x}{\Phi_0} t, k_y - 2\pi \frac{\Phi}{\Phi_0} \frac{1}{L_y}) \\ E^\ell(t, \Phi, \vec{k}) &= E_0^\ell(k_x + 2\pi \frac{acE_x}{\Phi_0} t, k_y - 2\pi \frac{\Phi}{\Phi_0} \frac{1}{L_y}) \end{aligned}$$

と書ける。ここで

$$\mathbf{H}_0(\vec{k}) \psi_0^\ell(\vec{k}) = E_0^\ell(\vec{k}) \psi_0^\ell(\vec{k})$$

は外場の無い場合のプロット関数が満たす式である。
よって

$$\begin{aligned} |\partial_t \alpha\rangle &= \sum_{\vec{k}_d, \ell_d} \prod_{\vec{k}, \ell} \left(\sum_j c_j^\dagger \psi_j^1(\vec{k}, t, \Phi) \right) \cdots \left(\sum_j c_j^\dagger \partial_t \psi_j^{\ell_d}(\vec{k}_d, t, \Phi) \right) \cdots |0\rangle \\ &= 2\pi \frac{acE_x}{\Phi_0} \sum_{\vec{k}_d, \ell_d} \prod_{\vec{k}, \ell} \left(\sum_j c_j^\dagger \psi_j^1(\vec{k}, t, \Phi) \right) \cdots \left(\sum_j c_j^\dagger \partial_{k_x} \psi_j^{\ell_d}(\vec{k}_d, t, \Phi) \right) \cdots |0\rangle \\ &\equiv 2\pi \frac{acE_x}{\Phi_0} |\partial_{k_x} \alpha\rangle \end{aligned}$$

ここで積の ' は \vec{k}_d, ℓ_d にだけ微分がかかりその他は $|\alpha\rangle$ と同じものが現れることを意味する。最

後の式は前式の略記である。(微分は係数にのみ作用すると思える) これと全く平行に

$$\begin{aligned}
 |\partial_\Phi \alpha\rangle &= \sum_{\vec{k}_d, \ell_d} \prod_{\vec{k}, \ell} \left(\sum_j c_j^\dagger \psi_j^1(\vec{k}, t, \Phi) \right) \cdots \left(\sum_j c_j^\dagger \partial_\Phi \psi_j^{\ell_d}(\vec{k}_d, t, \Phi) \right) \cdots |0\rangle \\
 &= -2\pi \frac{1}{\Phi_0} \frac{1}{L_y} \sum_{\vec{k}_d, \ell_d} \prod_{\vec{k}, \ell} \left(\sum_j c_j^\dagger \psi_j^1(\vec{k}, t, \Phi) \right) \cdots \left(\sum_j c_j^\dagger \partial_{k_y} \psi_j^{\ell_d}(\vec{k}_d, t, \Phi) \right) \cdots |0\rangle \\
 &\equiv -2\pi \frac{1}{\Phi_0} \frac{1}{L_y} |\partial_{k_y} \alpha\rangle
 \end{aligned}$$

ここでも最後の式はその前の式の略記である。

次に以下の事実を確認しよう¹⁷

$$\langle \beta | \partial_\Phi H | \alpha \rangle = (E_\alpha - E_\beta) \langle \beta | \partial_\Phi \alpha \rangle = (E_\beta - E_\alpha) \langle \partial_\Phi \beta | \alpha \rangle, \quad (\beta \neq \alpha)$$

これより^{18 19}

$$\begin{aligned}
 \langle I_y \rangle &= \langle G | I_y | G \rangle \\
 &= ci\hbar \sum_{\alpha \neq g} \frac{\langle g | \partial_\Phi H | \alpha \rangle \langle \alpha | \partial_t g \rangle - \langle \partial_t g | \alpha \rangle \langle \alpha | \partial_\Phi H | g \rangle}{E_\alpha - E_g} \\
 &= ci\hbar \sum_{\alpha \neq g} (-\langle \partial_\Phi g | \alpha \rangle \langle \alpha | \partial_t g \rangle + \langle \partial_t g | \alpha \rangle \langle \alpha | \partial_\Phi g \rangle) \\
 &= (ci\hbar) \left(2\pi \frac{acE_x}{\Phi_0} \right) \left(-2\pi \frac{1}{\Phi_0} \frac{1}{L_y} \right) \sum_{\alpha \neq g} \left(\langle \partial_{k_x} g | \alpha \rangle \langle \alpha | \partial_{k_y} g \rangle - \langle \partial_{k_y} g | \alpha \rangle \langle \alpha | \partial_{k_x} g \rangle \right) \\
 &= -i2\pi \frac{e^2}{h} \frac{aE_x}{L_y} \sum_{\alpha \neq g} \left(\langle \partial_{k_x} g | \alpha \rangle \langle \alpha | \partial_{k_y} g \rangle - \langle \partial_{k_y} g | \alpha \rangle \langle \alpha | \partial_{k_x} g \rangle \right) \\
 &= -i2\pi \frac{e^2}{h} \frac{aE_x}{L_y} \left(\langle \partial_{k_x} g | \partial_{k_y} g \rangle - \langle \partial_{k_y} g | \partial_{k_x} g \rangle \right)
 \end{aligned}$$

以下これを変形して²⁰

$$\begin{aligned}
 \langle I_y \rangle &= \frac{e^2}{h} aE_x L_x \sum_{\ell} \frac{1}{2\pi i} \int_{T_{MBZ}} d^2k (\text{rot}_k \vec{A}^\ell)_z \\
 &= \sigma_{yx} V_x, \quad (V_x = E_x a L_x) \\
 \sigma_{yx} &= \frac{e^2}{h} \sum_{\ell} \frac{1}{2\pi i} \int_{T_{MBZ}} d^2k (\text{rot}_k \vec{A}^\ell)_z = -\sigma_{xy} \\
 \vec{A}^\ell &= \langle \psi^\ell | \vec{\nabla}_k \psi^\ell \rangle
 \end{aligned}$$

これが求める式であった。

3.1.2 チャーン数と渦度、ディラックモノポールとのアナロジー

前節で与えられたホール伝導度の表式のトポロジカルな意味をここで詳しく議論しよう [16, 17, 4, 23, 19]。前節の結果を次の様に書こう。

$$\begin{aligned}\sigma_{xy}^{j, \text{bulk}} &= -\frac{e^2}{h} C, \quad C = \sum_{\ell=0}^j c_{\ell} \\ c_{\ell} &= \frac{1}{2\pi i} \int_{T_{\text{MHZ}}} d\vec{S}_k \cdot \vec{B}^{\ell} \\ \vec{B}^{\ell} &= \text{rot}_k \vec{A}^{\ell} \\ \vec{A}^{\ell} &= \langle \psi^{\ell} | \vec{\nabla}_k \psi^{\ell} \rangle \\ |\Psi\rangle &= \begin{pmatrix} \Psi_1 \\ \vdots \\ \Psi_q \end{pmatrix}, \quad \sum_{k=1}^q |\Psi_k|^2 = 1\end{aligned}$$

この c_{ℓ} を ℓ 番目のバンドのチャーン数と呼ぶ。

最初に積分領域である磁氣的ブリルアンゾーンは x 方向に周期 2π , y 方向に周期 $2\pi/q$ と周期的でありトーラス T^2 と見なせることに注意しよう。よって単純にストークスの定理を適用すると境界がないことより

$$c_j = 0$$

となるこれは正しくない。ブリルアンゾーン上で被積分関数に特異性があり全域で \vec{A} は定義されないのである。

この特異性をていねいに議論しよう。[17, 19]²¹

最初にブロッホ関数 $|\Psi(\vec{k})\rangle$ は位相の自由度を持つことに注意する。つまり任意の関数 $\xi_{BA}(\vec{k})$ に対して

$$|\Psi^B\rangle = e^{i\xi_{BA}(\vec{k})} |\Psi^A\rangle$$

と2つのブロッホ関数 $|\Psi^{A,B}\rangle$ をの間の関係を定めれば

$$\vec{A}^B = \langle \Psi^B | \vec{\nabla}_k \Psi^B \rangle = \vec{A}^A + \vec{\nabla}_k \xi_{BA}(\vec{k})$$

よって

$$\text{rot } \vec{A}^B = \text{rot } \vec{A}^A$$

とチャーン数は不変である。これは磁氣的ブリルアンゾーン上でのゲージ変換と対応する場の量の不変性と解釈できる。このゲージ変換の自由度(結局、これはよく知られた線形方程式の固有ベクトルの位相は確定しないことにこの自由度は起因する。)を用いて特異性なくチャーン数を計算することを考えよう。具体的に計算を実行するには何らかのゲージ(位相)を固定することが必要である。ここでは第一のゲージとしてある方法で得られた規格化されたブロッホ関数 $|\bar{\Psi}\rangle$ に適当な位相因子をかけ、ブロッホ関数の第 q 成分が正の実数となるようにしよう。

$$\begin{aligned}|\Psi^A\rangle &= e^{-i\text{Arg } \bar{\Psi}_q} |\bar{\Psi}\rangle \\ \Psi_q^A &> 0\end{aligned}$$

これは $\bar{\Psi}_q$ のゼロ点以外であれば常に可能である。逆にいうと $\bar{\Psi}_q$ のゼロ点

$$\bar{\Psi}_q = 0$$

ではこのゲージ A (ルール) ではブロッホ関数が一意に決まらない。そこでこのような点

$$\vec{k} = \vec{k}_s, \quad s = 1, \dots, \quad \bar{\Psi}_q(\vec{k}_s) = 0$$

の近傍 R_s では別なゲージとして

$$\begin{aligned}|\Psi^B\rangle &= e^{-i\text{Arg } \bar{\Psi}_1} |\bar{\Psi}\rangle \\ \Psi_1^B &> 0\end{aligned}$$

なるものをとることとしよう。(これらの近傍は $\bar{\Psi}_q$ のゼロ点を 1 個だけ含み、 $\bar{\Psi}_1$ のゼロ点は含まないように十分小さくとる。) この 2 つのゲージをつなぐゲージ変換は

$$\xi_{BA} = \text{Im} \log \frac{\bar{\Psi}_q}{\bar{\Psi}_1}$$

であり ($\bar{\Psi}_1, \bar{\Psi}_q$ のゼロ点以外で) 定義されることとなる。これらの 2 つのゲージを使い磁氣的ブリルアンゾーン T_{MBZ} を次のように分割する。

$$R = \bigcup_{i=1} R_i, \quad T_{MBZ} \setminus R$$

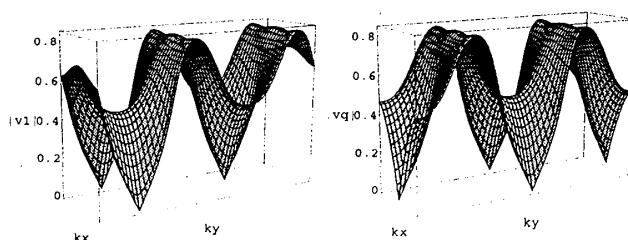


図 3: $\phi = \frac{1}{3}$ の場合の下から 2 番目のエネルギーバンドのブロッホ関数の振幅

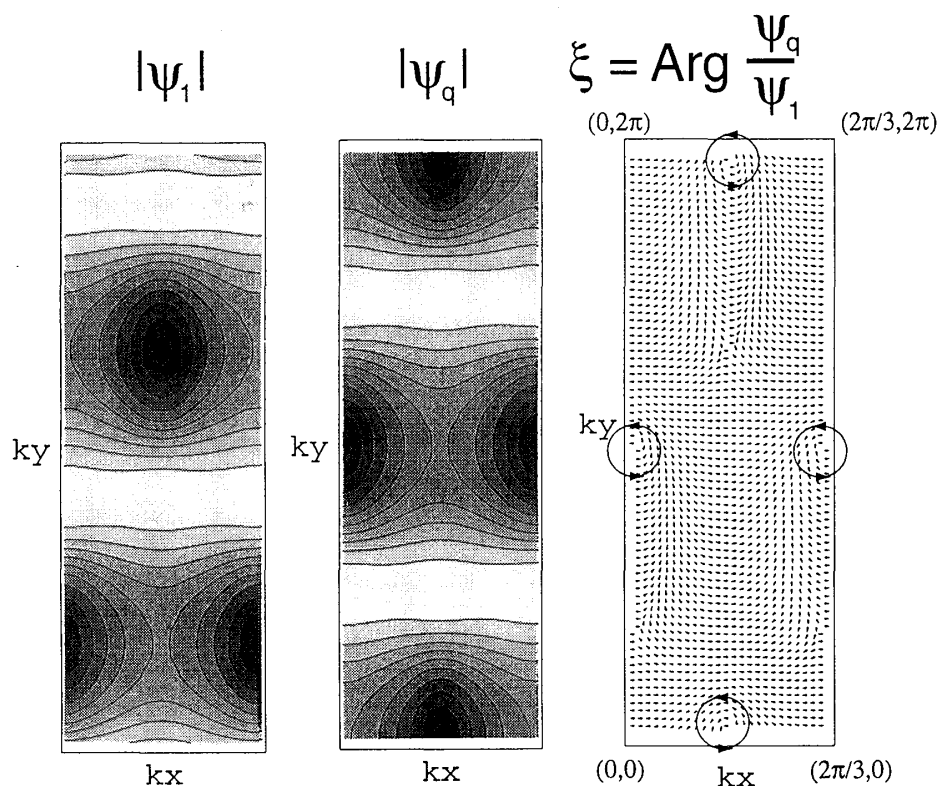


図 4: $\phi = \frac{1}{3}$ の場合の下から 2 番目のエネルギーバンドのブロッホ関数の振幅と相対位相から定まる渦度

その後、それぞれの領域でストークスの定理を使うこととするよって

$$\begin{aligned}
 c_j &= \frac{1}{2\pi i} \int_R d^2 k (\text{rot } \mathcal{A}^B)_z + \int_{T_{ABZ} \setminus R} d^2 k (\text{rot } \mathcal{A}^A)_z \\
 &= \frac{1}{2\pi i} \oint_{\partial R} d\vec{k} \cdot \vec{\mathcal{A}}^B + \oint_{\partial(T \setminus R)} d\vec{k} \cdot \vec{\mathcal{A}}^A \\
 &= \frac{1}{2\pi i} \sum_s \oint_{\partial R_s} d\vec{k} \cdot (\vec{\mathcal{A}}^B - \vec{\mathcal{A}}^A) \\
 &= \sum_s \frac{1}{2\pi} \oint_{\partial R_s} d\vec{k} \cdot \vec{\xi}_{BA} \\
 &= \sum_s \frac{1}{2\pi} \oint_{\partial R_s} d\vec{k} \cdot \text{Im} \log \Psi_q(\vec{k}) \\
 &= \sum_s N_s \\
 N_s &= \frac{1}{2\pi} \oint_{\partial R_s} d\vec{k} \cdot \text{Im} \log \Psi_q(\vec{k})
 \end{aligned}$$

となる。

つまりチャーン数はブロッホ関数 (の任意) のある成分のゼロ点が定義するゼロ点 (s) まわりの整数である渦度 N_s の和として与えられることがわかった。

これは数学的にはこの状況はファイバーバンドルとして記述されることを意味する。よく知られた類似の例としては Dirac の単磁極の例がある [29, 30]。このアナロジーによれば、ホール伝導度の量子化は単磁極の量子化のアナログとも考えられる。

これを復習してみよう。極座標表示された次の2つの異なるベクトルポテンシャルを考える。

$$\begin{aligned}
 \vec{\mathcal{A}}^A &= g \frac{1 - \cos \theta}{r \sin \theta} \vec{e}_\phi = g \frac{1}{r(r+z)} (-y, x), \quad \vec{e}_\phi = (-\sin \phi, \cos \phi) \\
 \vec{\mathcal{A}}^B &= -g \frac{1 - \cos \theta}{r \sin \theta} \vec{e}_\phi = -g \frac{1}{r(r-z)} (-y, x)
 \end{aligned}$$

これらは

$$\begin{aligned}
 \vec{\mathcal{A}}^A - \vec{\mathcal{A}}^B &= g \frac{2}{r \sin \theta} \vec{e}_\phi = \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial \xi_{BA}}{\partial \phi} \vec{e}_\phi, \\
 &= \vec{\nabla} \xi_{BA} \\
 \xi_{BA} &= 2g\phi
 \end{aligned}$$

と書ける。これらは ξ_{BA} によるゲージ変換で結ばれているためその磁場は等しく

$$\begin{aligned}
 \vec{B} &= \text{rot } \vec{\mathcal{A}}^A = \text{rot } \vec{\mathcal{A}}^B \\
 &= \frac{\vec{r}}{r^3}
 \end{aligned}$$

となり原点に磁場の湧き出しがあることとなる (磁気単極子)。ただし $\mathcal{A}^A, \mathcal{A}^B$ の定義域について考えてみると分母がゼロとなるところでは定義されていないことから

$$\begin{cases} \vec{\mathcal{A}}^A & : z \text{ 軸負方向をのぞく, } (\cos \theta \neq -1) \\ \vec{\mathcal{A}}^B & : z \text{ 軸正方向をのぞく, } (\cos \theta \neq +1) \end{cases}$$

となっていることに注意しよう。(これらの特異点はストリングと呼ばれることがある。) 次に原点を含む閉曲面上 (例えば単位球面上) で全磁束を計算することを考えると

$$\Phi_{\text{total}} = \int_S d\vec{S} \cdot \vec{B} = 4\pi g$$

となるのは \vec{B} の表式よりすぐにわかる。一方これをストークスの定理を用いてベクトルポテンシャルから計算してみよう。その際、上記のベクトルポテンシャルの特異性に注意すると球面 A を北半球 S_A 、南半球 S_B 、に分けそれぞれで異なるゲージを用いて計算することが必要となる。

$$\begin{aligned}
 \Phi_{total} &= \int_S d\vec{S} \cdot \vec{B} = \int_A d\vec{S} \cdot \vec{B} + \int_B d\vec{S} \cdot \vec{B} \\
 &= \int_A d\vec{S} \cdot \text{rot } \vec{A}^A + \int_B d\vec{S} \cdot \text{rot } \vec{A}^B \\
 &= \int_{\partial S_A} d\vec{r} \cdot \vec{A}^A + \int_{\partial S_B} d\vec{r} \cdot \vec{A}^B \\
 &= \int_{C_{eq}} d\vec{r} \cdot (\vec{A}^A - \vec{A}^B), \quad (C_{eq} = \partial C_A : \text{赤道}, \theta = 0) \\
 &= \int_{C_{eq}} d\vec{r} \cdot \vec{\nabla} \xi_{BA} = \int_0^{2\pi} d\phi \, 2g = 4\pi g
 \end{aligned}$$

つまり、ベクトルポテンシャルに特異性が（必然的に）ある場合、全系で一度に積分定理を使うのではなく適宜領域をパッチにわけそれぞれの領域ごとに適用すればよいことのである。

3.2 境界のある系でのゲージ不変性による Laughlin の議論

ここでは Laughlin によるホール伝導度の量子化に関するゲージ不変性の議論を紹介したい [8, 9]。現実のサンプルには必ず境界があることを考え図のようなシリンダー状のいわゆる Laughlin の配置を考えよう。ここで Φ はシリンダーを貫くアハロノフ・ボーム磁束である。

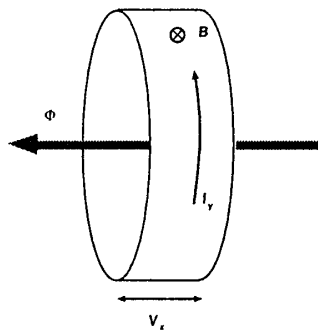


図 5: Laughlin の配置。シリンダー状の系に幅をよぎる方向に電圧をかけ、輪の方向の電流を測定する

この配置で Laughlin は次のような議論を行った。 Φ を断熱的に $\Delta\Phi$ だけ変化させる。その過程で系にした仕事量 ΔE を計算しよう。そのときシリンダーの輪方向の電流 I_y はいわゆる Byers-Yang の公式 [25] により、

$$I_y = c \frac{\Delta E}{\Delta\Phi}$$

となる。²²

このとき $\Delta\Phi = \Phi_0$ $\Phi_0 = \frac{hc}{e}$ は磁束量子である場合を考える。(系が十分大きいとき磁束単位の変化は境界条件の変化とみなせるので微小変化と考えられ微分に置き換えられる) アハロノフ・ボーム磁束を磁束量子変化させた場合、物理系は（大きな）ゲージ変換によりもとの状態に戻る。よってこのあいだになされた仕事量は、シリンダーの一方の端から他端へ 何個か（整数 n 個）電子が移動されたことによると考えられる。そこでこの両端の間の電位差を V_x とすると $\Delta E = neV_x$ となる。これらを代入すれば

$$I_y = n \frac{e^2}{h} V_x$$

これが Laughlin による整数量子ホール効果の量子化に関する説明である。[8] これは非常に強力な議論で乱れのある場合等、種々の状況に拡張可能である汎用の考察である。ただし「ここでの n は整数ではあるがいくつであるかはこの議論からは定められない」点にその最大の弱点がある。

さらにこの議論は分数量子ホール効果の場合にも拡張されそこでの有効的な分数電荷の存在と基底状態の多重性を意味することとなる。(講義では時間があれば議論する予定)

実はこの Laughlin の議論では不定であった整数 n にはバルク(無限系)の場合とは全く異なる位相幾何学的意味があるのである。それについて次に紹介したい [18]。

3.3 境界を持つ系におけるホール伝導度のトポロジカルな意味— リーマン面上でのエッジ状態の回転数と交点数 —[18]

配置としては Laughlin のものと同じシリンダー状の系を考える。具体的には図のような系を考え y 方向へは周期的境界条件をとる。ゲージとしては、シリンダーの両端をつなぐ方向へ増加するランダウゲージで考える。

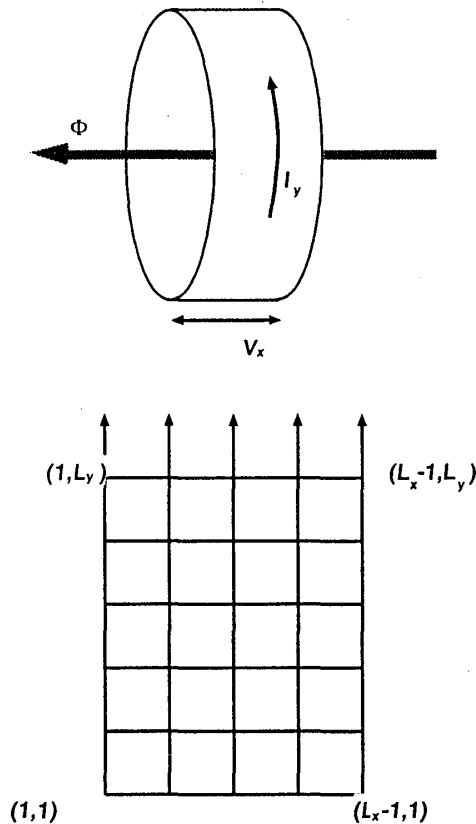


図 6: 格子上での境界のある系、Laughlin の配置。 y 方向に L_y サイト、 x 方向に $L_x - 1$ サイトとし、 y 方向には周期的境界条件をおく。

次の数節は少し話が細かく、長くなる。そこで以下具体的に議論するまえに議論の大筋を説明しておこう。

このゲージのもとで系はシリンダーの輪の方向には最小の並進で不変であることに注意しよう。これより 2次元の問題は、シリンダーの輪の方向の波数 k_y ごとの 1次元系に帰着することに注意する。さらにこの 1次元系は両端をもつのでその両端に局在した束縛状態をもつ場合がある。この束縛状態が 2次元系の言葉では量子ホール効果においてエッジ状態と呼ばれるものである。その束縛状態の振る舞いがホール伝導度、つまり Laughlin の議論の未定の整数 n を定めるわけだが、その振る舞いはこの 1次元系の複素エネルギー面を考えるとわかりやすい。(量子力学で習う

Levinson の定理を思い出してもらいたいかもしれない。束縛状態（エッジ状態）と散乱状態（バルク状態）はお互いに関連しており、他の有名な応用としては Friedel の総和則があるのはよく知られている。）この複素エネルギー面はやや複雑でエネルギーバンドが q 個 ($\phi = p/q$ の時を考えて。) あることに対応して $g = q - 1$ 個の穴をもつ浮輪となる。(図 7) これはリーマン面と呼ばれる。

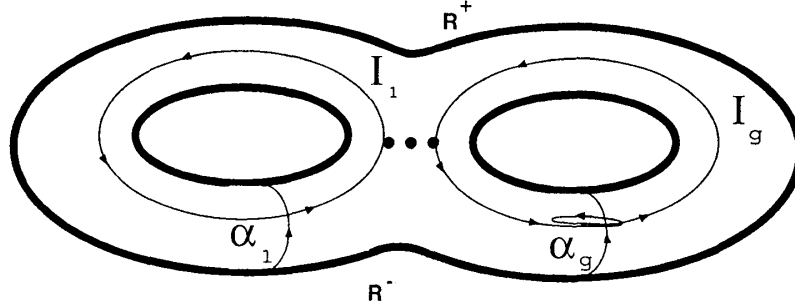


図 7: 磁場中の電子系の複素エネルギー面としてのリーマン面 Σ_g 。穴の数 $g = q - 1$ はエネルギーギャップの個数に等しく、単位格子あたりの磁束は $\phi = \frac{p}{q}$ である。

この g 個の穴が $q - 1$ 個のエネルギーギャップに対応する。この複素エネルギー面上で束縛状態（エッジ状態）のエネルギーは g 個存在することとなる。以上はシリンダーの輪方向の波数 k_y を固定した 1 次元系の議論である。次に、波数 k_y を 0 から 2π まで変化させることを考え 2 次元の問題を議論しよう。すると 0 と 2π は同一視すべきであることを考えると g 個のエッジ状態のエネルギーはこの浮輪上で閉曲線をつくることになる。復習すると浮輪の穴はエネルギーギャップ（下から j 番目のエネルギーギャップとしよう）に対応していたわけだがその穴のまわりをエッジ状態のエネルギーが何回か (I_j 回) まわるわけである。実はここで与えた回転数 I_j がフェルミエネルギーがそのエネルギーギャップにある状況における Laughlin の未定整数 n を与えることとなるのである。[18, 19] ²³

境界を持つ系でのホール伝導度のトポロジカルな表式

$$\sigma_{xy}^{edge} = -I_j \frac{e^2}{h}$$

3.3.1 転送行列とエッジ状態

ハミルトニアンはバルクの場合と同じ次のものにとる。境界条件は y 方向には aL_y の長さで周期的 x 方向には $a(L_x - 2)$ の長さで固定端の境界条件をおく (サイト数としては $L_x - 1$ 個。)

配置としては Laughlin のものと同じシリンダー状の系を考える。具体的には図のような系を考え y 方向へは周期的境界条件をとる。ゲージとしては、シリンダーの両端をつなぐ方向へ増加するランダウゲージで考える。

$$H(\Phi) = \sum_{m,n} c_{m+1,n}^\dagger c_{m,n} + e^{i2\pi \frac{\Phi}{\Phi_0} \frac{1}{L_y}} \sum_{m,n} c_{m,n+1}^\dagger e^{i2\pi \phi m} c_{m,n}$$

現在の系は y 方向にだけ周期的であることに注意して y 方向には運動量表示とした演算子 $c_m(\vec{k})$ を導入しよう。

$$c_{m,n} = \frac{1}{\sqrt{L_y}} \sum_{\vec{k}_y = 2\pi \frac{n}{L_y}} e^{ik_y n} c_m(k_y), \quad (n_y = 1, \dots, L_y)$$

すると

$$H = \sum_{k_y} H(k_y, \Phi)$$

$$H(k_y, \Phi) = -t \sum_{m=1}^{L_x-2} [c_{m+1}^\dagger(k_y) c_m(k_y) + c_m^\dagger(k_y) c_{m+1}(k_y)]$$

$$-2t \sum_{m=1}^{L_x-1} \cos(k_y - 2\pi \frac{\Phi}{\Phi_0 L_y} - 2\pi \phi m) c_m^\dagger(k_y) c_m(k_y).$$

この系はをパラメーターとする1次元系のハミルトニアン和であるから、1次元系の一粒子シュレディンガー方程式

$$H(k_y, \Phi) |\Psi(k_y, \Phi)\rangle = E(k_y, \Phi) |\Psi(k_y, \Phi)\rangle$$

$$|\Psi(k_y, \Phi)\rangle = \sum_m \Psi_m(k_y, \Phi) c_m^\dagger(k_y) |0\rangle$$

をまず考えよう。ここで

$$\Psi_m(k_y, \Phi) = \Psi_m^0(k_y - 2\pi \frac{\Phi}{\Phi_0})$$

と Φ 依存性は k_y 依存性に吸収できることに注意しよう。まずこの波動関数 Ψ_m^0 は次の関係式を満たすことに注意しよう。

$$-t(\Psi_{m+1}^0(k_y) + \Psi_{m-1}^0(k_y)) - 2t \cos(k_y - 2\pi \phi m) \Psi_m^0(k_y) = E \Psi_m^0(k_y)$$

これを $\epsilon = \frac{E}{t}$ として、いわゆる転送行列の形で次のように書こう。

$$\begin{pmatrix} \Psi_{m+1}^0(\epsilon, k_y) \\ \Psi_m^0(\epsilon, k_y) \end{pmatrix} = \tilde{M}_m(\epsilon, k_y) \begin{pmatrix} \Psi_m^0(\epsilon, k_y) \\ \Psi_{m-1}^0(\epsilon, k_y) \end{pmatrix}$$

$$\tilde{M}_m(\epsilon, k_y) = \begin{pmatrix} -\epsilon - 2 \cos(k_y - 2\pi \phi m) & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$$

これを繰り返すついでに(添え字の0を省略する)

$$\begin{pmatrix} \Psi_{L_x+1}(\epsilon) \\ \Psi_{L_x}(\epsilon) \end{pmatrix} = (M(\epsilon))^L \begin{pmatrix} \Psi_1 \\ \Psi_0 \end{pmatrix},$$

$$M(\epsilon) = \tilde{M}_q(\epsilon) \tilde{M}_{q-1}(\epsilon) \cdots \tilde{M}_2(\epsilon) \tilde{M}_1(\epsilon) = \begin{pmatrix} M_{11}(\epsilon) & M_{12}(\epsilon) \\ M_{21}(\epsilon) & M_{22}(\epsilon) \end{pmatrix},$$

を得る。ここで $M_{11}(\epsilon), M_{12}(\epsilon), M_{21}(\epsilon), M_{22}(\epsilon)$ は ϵ のそれぞれ $q, q-1, q-1, q-2$ 次の多項式である。

この転送行列及び境界条件から系の波動関数、スペクトルが求まることとなる。(この1次元系は格子上の Hill 方程式と呼ばれ Strum-Liouville 型の微分方程式の一般論の格子アナログが古くからある(例えば戸田盛和著「非線形格子」等)ここでの1次元系での議論はその結果を使うこととなる。ここで我々の問題とする点はそれらがどのように2次元の物理と関連するかにある。[26, 27, 28])

付加的な条件として、ここで系の大きさに対して整合性の

$$L_x - 1 = q\ell, \quad \ell | (L_x - 1)$$

を要求しよう。

このとき、系のスペクトルは境界条件

$$\Psi_0 = \Psi_{L_x} = 0$$

から定まることとなる。規格化の条件として

$$\Psi_1 = 1$$

をとれば

$$\Psi_{L_x} = M_{21}(\epsilon) = 0$$

は $L_x - 1$ 次の方程式の解であり $L_x - 1$ 個の実根を持つ。これがこの 1 次元系のスペクトルを与えることとなる。(実根であることはそれらがエルミート行列の固有値であることから保証される。)

まず

$$M_{12}(\epsilon) = 0$$

の解 μ_j , $j = 1, \dots, q-1 = g$ が $\Psi_{L_x} = M_{21}(\epsilon) = 0$ を満たすことは三角行列の冪乗は三角行列であることからわかる。これらがすべて実であることは $g = q-1$ サイトの系の固有値であることが保証する。実はこの $g = q-1$ 個がエッジ状態のエネルギーである。

転送行列より k を一般の整数として

$$\Psi_{qk+1}(\mu_j) = [M_{11}(\mu_j)]^k$$

となる。これより一般には $|M_{11}(\mu_j)| \neq 1$ であるから

$$\begin{aligned} |M_{11}(\mu_j)| < 1: & \quad x \approx 1 \text{ に局在したエッジ状態} & : (\text{左の境界}) \\ |M_{11}(\mu_j)| > 1: & \quad x \approx L_x - 1 \text{ に局在したエッジ状態} & : (\text{右の境界}). \end{aligned}$$

であることがわかる。($|M_{11}(\mu_j)| \neq 1$ を満たす状態は後で判るようにバルク状態と縮退した状態であり、トポロジカルな議論においてもバルクとエッジの議論をつなぐ重要な役割を持つ。)

3.3.2 転送行列とバルク状態

転送行列を使って境界が無い場合つまりバルクの系について議論しよう。

境界の無い場合この 1 次元系は周期 q を持つ周期系であるからブロッホの定理により

$$\Psi_{m+q}(\epsilon) = \rho(\epsilon)\Psi_m(\epsilon), \quad |\rho(\epsilon)| = 1.$$

と書ける。これは

$$\begin{pmatrix} \Psi_{q+1} \\ \Psi_q \end{pmatrix} = M \begin{pmatrix} \Psi_{q+1} \\ \Psi_q \end{pmatrix} = \rho \begin{pmatrix} \Psi_1 \\ \Psi_0 \end{pmatrix}$$

つまり ρ は転送行列 M の固有値であることを意味する。これから $(\det \tilde{M}_m(\epsilon) = 1$ がすべての m で成立するので

$$\det M(\epsilon) = M_{11}(\epsilon)M_{22}(\epsilon) - M_{12}(\epsilon)M_{21}(\epsilon) = 1,$$

)

$$\rho^2 - \Delta\rho + 1 = 0, \quad \Delta = \text{Tr}M = M_{11} + M_{22}$$

を満たす。二次方程式の議論から $|\rho| = 1$ はエネルギー ϵ を実として

$$(\Delta(\epsilon))^2 \leq 4$$

と同値で、これがエネルギーバンドのエネルギーを与える式となることを注意しよう。一般にエネルギーバンドは q 個あるから

$$\Delta(\epsilon)^2 - 4 = (\epsilon - \lambda_1)(\epsilon - \lambda_2) \cdots (\epsilon - \lambda_{2q-1})(\epsilon - \lambda_{2q})$$

とバンド端のエネルギー λ_j , $(\lambda_i < \lambda_j, i < j)$ を用いて因数分解できることに注意しよう。よって

$$\rho(z) = \frac{1}{2}(\Delta(z) - \sqrt{\Delta(z)^2 - 4})$$

ここで分枝を定めるためにエネルギー ϵ を解析接続して複素エネルギー z を導入した。

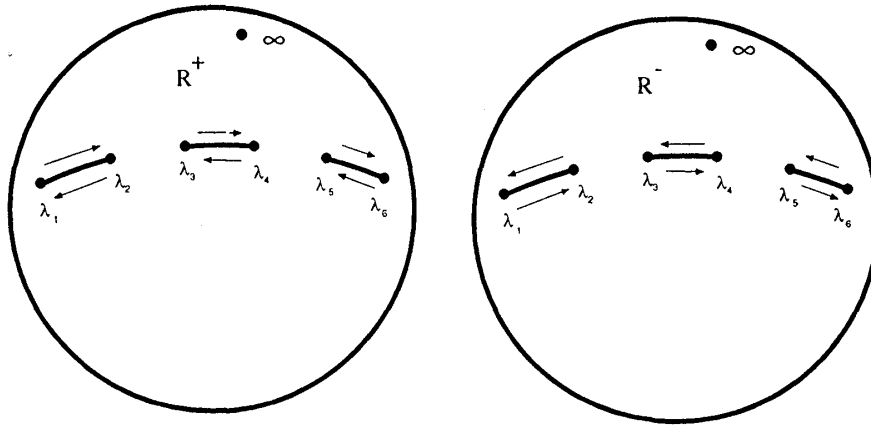


図 8: ステップ 1: 実軸にブランチカットをいれる

次にバルクの系に対しても波動関数は境界を持つ場合と同様の規格化条件

$$\Psi_1 = 1$$

を要求すると転送行列の固有ベクトルから次のように Ψ_q は定まる。²⁴

$$\begin{aligned}\Psi_q(z) &= \frac{\rho(z)}{\rho(z) - M_{22}(z)} M_{21}(z) \\ &= \frac{M_{11} + M_{22} - \sqrt{\Delta^2 - 4}}{M_{11} - M_{22} - \sqrt{\Delta^2 - 4}} M_{21}\end{aligned}$$

ここで波動関数は複素エネルギー面上で定義されていることに注意しよう。
この複素エネルギー面（リーマン面）についてここでしばらく議論しよう。

次の複素関数のリーマン面について考えよう。

$$f(z) = \sqrt{\Delta(z)^2 - 4} = \sqrt{(z - \lambda_1)(z - \lambda_2) \cdots (z - \lambda_{2q-1})(z - \lambda_{2q})}$$

まず、図の様に $g = q - 1$ 個のブランチカットを

$$[\lambda_1, \lambda_2], \cdots, [\lambda_{2q-1}, \lambda_{2q}]$$

を入れた R^+, R^- 2 枚のシート（リーマン球：無限遠点を同一視した複素平面）を用意する。

次にそれらをはりあわせてリーマン面を構成する。その際ブランチカットにおける向きに注意する。（図を参照）ただし分枝は R^+ 上で $z \rightarrow \infty$ のとき $\sqrt{\Delta^2 - 4} > 0$ としよう。すると下から j 番目のエネルギーギャップのエネルギー内のエネルギー ϵ に関しては

$$\alpha(-1)^j \sqrt{\Delta^2 - 4} > 0, \quad z \in R^\alpha, (\alpha = \pm)$$

となる。

この数学的事実を現在の物理的状況の下でまとめると

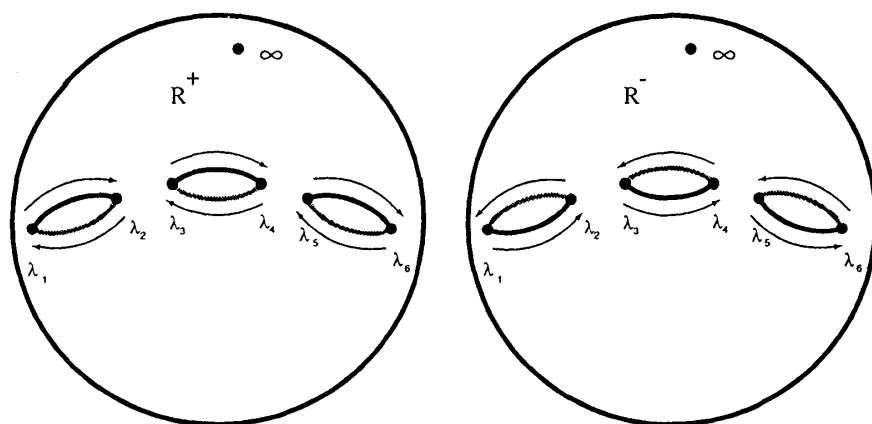


図 9: ステップ 2: 実軸にブランチカットをを切り開く

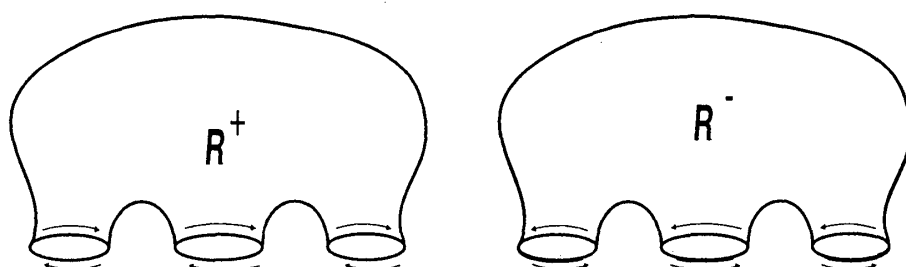


図 10: ステップ 3: 少し変形する

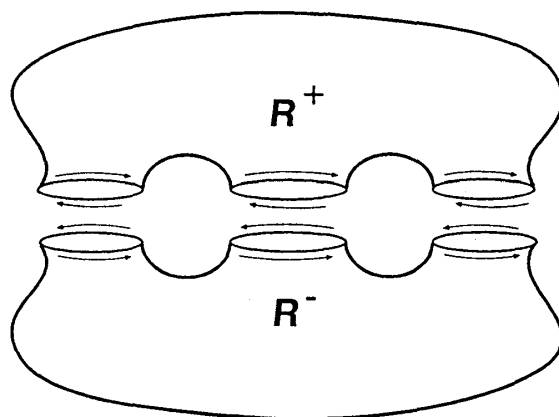


図 11: ステップ 4: 相対的な配置をかえ、張り合わせよう。

labelfig:step4

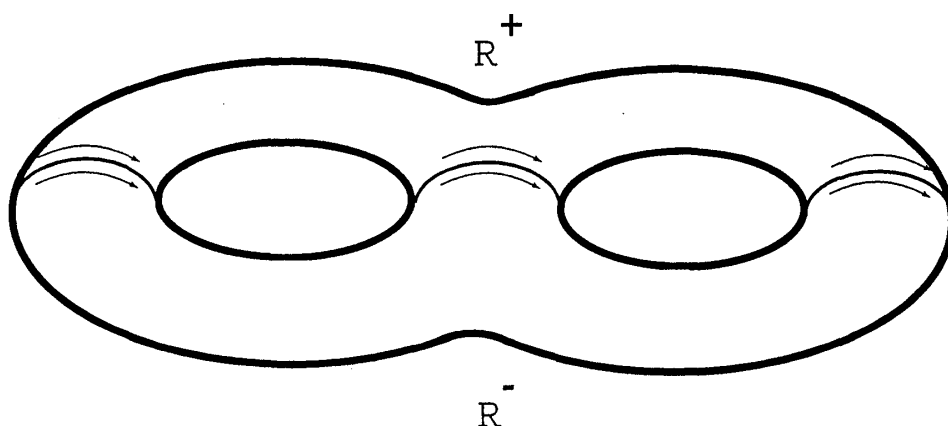


図 12: ステップ5: 出来上がり: ギャップが2個あるとき穴が2個できた

1次元系のリーマン面

$$\begin{aligned}
 &\text{複素エネルギー面} \leftrightarrow \text{種数 (穴の数) } g \text{ のリーマン面 } \Sigma_g \\
 &q \text{ 個のエネルギーバンド} \leftrightarrow q \text{ 個のブランチカット} \\
 &\quad (q \text{ 個}) \quad (\text{: リーマン面上くびれの部分}) \\
 &g = q - 1 \text{ 個のエネルギーギャップ} \leftrightarrow g = q - 1 \text{ 個のリーマン面上の穴}
 \end{aligned}$$

と対応することになる。

3.3.3 リーマン面上のエッジ状態

前節での議論より、波動関数はそのエネルギーに関してリーマン面 Σ_q 上で定義されていると考えられることがわかった。

ここでエッジ状態のエネルギー μ_j に関しては

$$M_{21}(\mu_j) = 0$$

であるから、 $\det M = 1$ より

$$M_{11}M_{22} = 1, \quad \Delta^2 - 4 = (M_{11} - M_{22})^2$$

さらに $\Delta(\epsilon)$ の最高次の係数を考えて

$$\Delta = M_{11} + M_{22} \begin{cases} \geq +2 & j: \text{偶数} \\ \leq -2 & j: \text{奇数} \end{cases}$$

よって

これからリーマン面上のプロット関数のエッジ状態のエネルギー近傍の振る舞いは²⁵

$$\Psi_q(\mu_j + \delta) \approx \frac{M_{11} + M_{22} - \alpha(-1)^j |M_{11} - M_{22}|}{M_{11} - M_{22} - \alpha(-1)^j |M_{11} - M_{22}|} M_{21}, \quad (\mu_j \in R^\alpha),$$

この分母をエッジ状態のエネルギー近傍で考えよう。まず j が偶数の場合 $M_{11} + M_{22} \geq 0$ であるから $M_{11}M_{22} = 1$ より

$$\begin{aligned} & M_{11} - M_{22} - \alpha|M_{11} - M_{22}| \\ &= \begin{cases} M_{11} - M_{22} - \alpha(M_{22} - M_{11}) & \text{左の境界に局在 } |M_{11}| \leq 1 : (M_{22} \geq M_{11}) \\ M_{11} - M_{22} - \alpha(M_{11} - M_{22}) & \text{右の境界に局在 } |M_{11}| \geq 1 : (M_{11} \geq M_{22}) \end{cases} \end{aligned}$$

より

$$\begin{aligned} & M_{11} - M_{22} - \alpha|M_{11} - M_{22}| \\ &\approx 0 \text{ (リニアにゼロとなる)}, \quad \begin{cases} \text{左の境界に局在 : } \alpha = - \text{ の時} \\ \text{右の境界に局在 : } \alpha = + \text{ の時} \end{cases} \end{aligned}$$

つぎに j が奇数の場合 $M_{11} + M_{22} \leq 0$ であるから $M_{11}M_{22} = 1$ より

$$\begin{aligned} & M_{11} - M_{22} + \alpha|M_{11} - M_{22}| \\ &= \begin{cases} M_{11} - M_{22} + \alpha(M_{11} - M_{22}) & \text{左の境界に局在 } |M_{11}| \leq 1 : (M_{11} \geq M_{22}) \\ M_{11} - M_{22} + \alpha(M_{22} - M_{11}) & \text{右の境界に局在 } |M_{11}| \geq 1 : (M_{22} \geq M_{11}) \end{cases} \end{aligned}$$

より

$$\begin{aligned} & M_{11} - M_{22} + \alpha|M_{11} - M_{22}| \\ &\approx 0 \text{ (リニアにゼロとなる)}, \quad \begin{cases} \text{左の境界に局在 : } \alpha = - \text{ の時} \\ \text{右の境界に局在 : } \alpha = + \text{ の時} \end{cases} \end{aligned}$$

つまり j の偶奇によらず、 $\Psi_q(\mu_j)$ の上記の表式の分母はエッジ状態が左の境界に局在している時は $\alpha = -$ の時にまたは右の境界に局在しているときは $\alpha = +$ の時にリニアにゼロとなることがわかる。ここで $M_{21}(\epsilon)$ は μ_j でリニアにゼロとなるから Ψ_q はリーマン面上片方のシート上のエッジ状態のエネルギーでのみゼロとなり、つまりエッジ状態の境界条件をみたし ($\Psi_q = \rho\Psi_0$) そのときのエッジ状態のエネルギーのシートとエッジ状態の局在している空間的位置が対応することがわかる。

これらの対応をまとめると

ブロッホ状態のリーマン面とエッジ状態

$$\begin{aligned} \text{エッジ状態は左の境界に局在する} &\leftrightarrow \Psi_q(z) \text{ は } R^+ \text{ 上 } (z = \mu_j) \text{ で零点を持つ} \\ \text{エッジ状態は右の境界に局在する} &\leftrightarrow \Psi_q(z) \text{ は } R^- \text{ 上 } (z = \mu_j) \text{ で零点を持つ} \\ \text{エネルギーバンド} &\leftrightarrow \text{ブランチカット} \\ &\quad (q \text{ 個}) \quad \quad \quad (: \text{リーマン面上のくびれ}) \\ \text{エネルギーギャップ} &\leftrightarrow \text{リーマン面上の穴} \\ &\quad (g = q - 1 \text{ 個}) \end{aligned}$$

つまり複素エネルギー面としてのリーマン面上のブロッホ関数のゼロ点をみればエッジ状態の空間的な情報がえられることがわかった [18]。

3.3.4 リーマン面上の回転数、交点数と Laughlin の議論

前節の議論はすべて y 方向の波数 k_y を固定した 1 次元系のものであったがここでそれを 2 次元の問題へ適用しよう。まず、 k_y を変化させても 1 次元系のエネルギーギャップは閉じないものとし

よう。つまり2次元の問題として安定なエネルギーギャップの存在を仮定しよう。(これが閉じる場合リーマン面にトポロジカルチェンジがおきるわけで、そこでは量子相転移が起こり、後述するDirac Fermionに有効的に現れることとなる。)この仮定のもとでは各波数でのリーマン面のトポロジカルな構造は不変であることに注意し、それらを同一視しよう。さらに波数 $k_y = 0$ と 2π は同一視されるから(ブリルアンゾーン)束縛状態(エッジ状態)の個数だけあるエッジ状態のエネルギーを与えるゼロ点 μ_j はリーマン面上で向きのついた閉ループ

$$C_j : \{z = \mu_j(k_y) | k_y \in [0, 2\pi]\}$$

を作ることとなる。一般には、これらの閉ループはリーマン面上の穴の周りを数回回転し、その符号をつけた回転数 I_j が定義されることとなる。

ここでいくつか具体的な計算例をしめそう。(図参照)

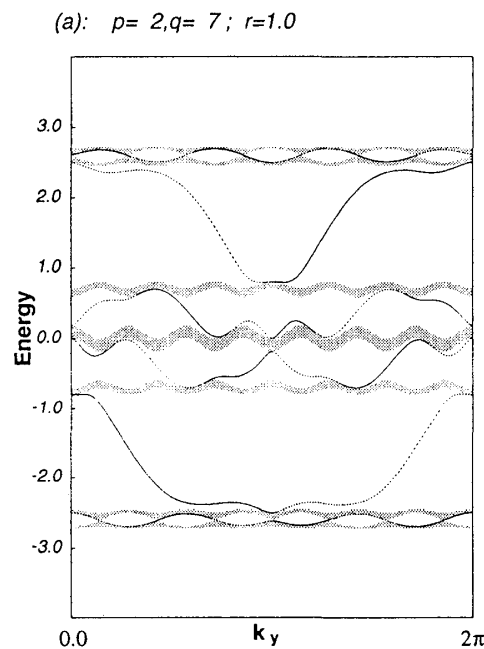


図 13: $\phi = \frac{2}{7}$ の場合のエネルギーバンド(斜線の領域)とエッジ状態のエネルギー(実線:右端に局在したエッジ状態、破線:左端に局在したエッジ状態)。エッジ状態が作る閉曲線のリーマン面上での交点数は下のエネルギーギャップから順に1である。

図中では各波数 k_y ごとに複素エネルギー面としてのリーマン面 $\Sigma_g(k_y)$ を考える。そのときの安定なギャップの数が $g = q - 1$ で、図で斜線で示した q 個の領域がエネルギーバンド、その間の領域がエネルギーギャップである。そのエネルギーギャップの中の実線、及び点線がエッジ状態のエネルギー μ_j 、すなわちプロット関数 Ψ_q のゼロ点で実線、点線はそのゼロ点がリーマン面 Σ_g 上 R^+, R^- にあること、つまりエッジ状態が左端、または右端に局在していることを意味する。

一般的な状況にかえて、リーマン面上の基本的な閉ループ

$$\alpha_j, j = 1, \dots, q$$

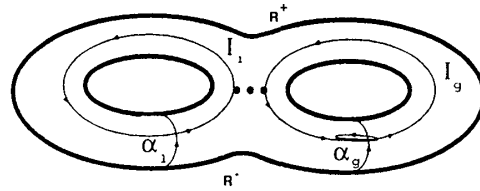


図 14: リーマン面上の閉曲線

を用いてブロッホ関数のゼロ点（エッジ状態のエネルギー）の回転数はエネルギーギャップごとに定義されるこの曲線 C_j と標準的な曲線 α_j との交点数となることも見て取れるであろう [27]。

$$I_j = I(\alpha_j, C_j)$$

なお交点数については曲線間の交点ごとに図 15 のように向きにより符号をつけた交点数を定義し、曲線 A, B 間の交点数 $I(A, B)$ はその和と定義される。

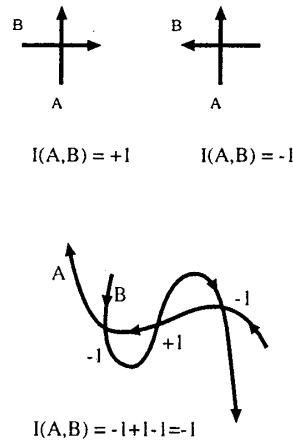


図 15: 曲線間の符号付き交点数

ここまでは数学の話だが、実は Laughlin の議論を用いるとこれが量子化されたホール伝導度となることがわかる。
これを次に説明しよう。

図の様にフェルミエネルギーがバルクのエネルギーギャップの中にある場合を考えよう。また y 方向の系の大きさ L_y も有限であることを思い出しすと波数 k_y が離散的となる。さらに波数と Aharonov-Bohm 磁束 Φ は

$$k_y + 2\pi \frac{\Phi}{\Phi_0}$$

と結合し離散化された波数は

$$k_y = 2\pi \frac{\text{整数}}{L_y}$$

であることに注意すれば、Aharonov-Bohm 磁束 Φ を Φ_0 だけ変化させたとき一粒子状態全体は不変であることはすぐわかる。

特に図のようにフェルミエネルギーがギャップ内にある場合、図で黒丸で示したエッジ状態が占有されていることとなる。そこで Aharonov-Bohm 磁束 Φ を Φ_0 だけ断熱的に増加させると、マクロな系では左右のエッジ状態間の行列要素は系の大きさに関して指数関数的に小さいのでその間の遷移は起こらないと考えてよい。よってこの過程の終状態としては下図の様な占有状態となる。ここでこの過程の前後、つまり図の左右を比べると、エネルギーバンド内の状態（バルク状

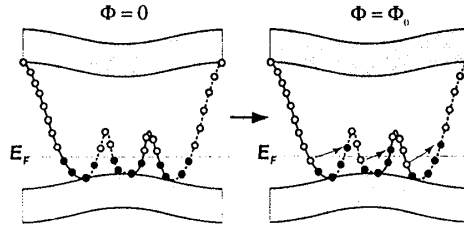


図 16: Laughlin の議論とエッジ状態、リーマン面上のゼロ点の移動の関係

態)はすべて元の状態に戻ったがエッジ状態は一つだけ玉突き式にずれた状態となっているのがわかるだろう。ここで与えられる状態の変化の個数がこの過程により両境界間を左から右へ移動した電子の数であり、Laughlin の議論で不定であった整数である。またリーマン面上のブロッホ関数のゼロ点とエッジ状態の対応からこの整数はエッジ状態の作る閉曲線の回転数となる！
つまり

—— ホール伝導度のエッジ状態によるトポロジカルな表式 ——

フェルミエネルギーが下から j 番目のエネルギーギャップにあるとき複素エネルギー面としてのとしてのブロッホ関数のゼロ点の作る閉曲線のリーマン面上の回転数（もしくは符号付き交点数）をもちいて、ホール伝導度は次のように与えられる [18]。

$$\sigma_{xy}^{j, \text{edge}} = -\frac{e^2}{h} I(C_j)$$

3.4 2つの位相不変量: — バルクかエッジか —

ここまでの議論でフェルミエネルギーが下から j 番目のエネルギーギャップの中にある場合系のホール伝導度に対して2つのトポロジカルな表式が与えられたこととなる。

$$\begin{aligned} \sigma_{xy}^{j, \text{bulk}} &= -\frac{e^2}{h} C, \quad C = \sum_{\ell=0}^j c_\ell \\ \sigma_{xy}^{j, \text{edge}} &= -\frac{e^2}{h} I(C_j) \end{aligned}$$

この節ではこの2つの表式の間の関係を考えよう。チャーン数の位相幾何学的意味を議論した際用いたゲージによると Ψ_q のゼロ点周りの渦度の和としてチャーン数が与えられたことを思い出そう。転送行列の議論では規格化しない波動関数を常に扱っていたことに注意し、

$$\Psi_q = 0$$

はエッジ状態を定義したことを思い出そう。また x 方向の波数 k_x はブロッホの定理から

$$\rho = e^{iqk_x}$$

と対応し、バンド端の条件

$$\Delta = \pm 2$$

は $\rho = \frac{1}{2}(\Delta - \sqrt{\Delta^2 - 4})$ より

$$k_x = 0, 2\pi/q$$

と対応する。つまり概念的には前節で示したエネルギーバンドの領域はブリルアンゾーンがトーラスであることに対応して図のような筒状の領域と考えられ $k_y = 0, 2\pi$ を同一視することでトーラスとなる。これより、チャーン数に寄与するブロッホ関数のゼロ点はバンド端のみに存在し、具体

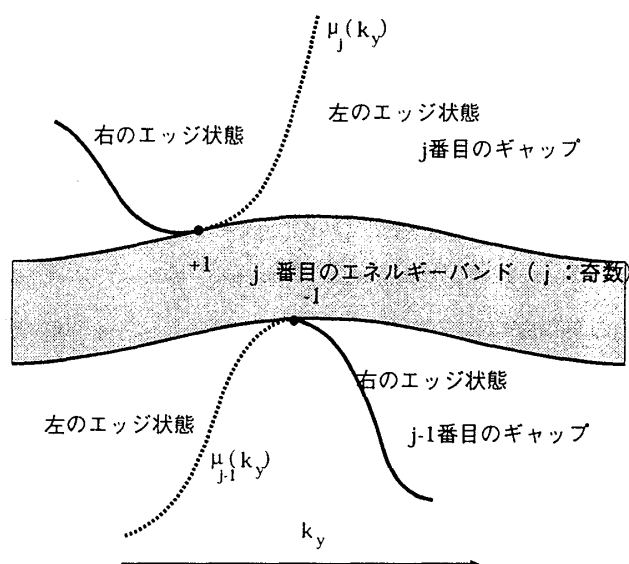


図 17: エッジ状態がエネルギーバンドに接するところでチャーン数を与える渦を与える。エネルギーバンドの上端、下端での接点で波動関数を展開すれば前節で説明したワインディング数 (交点数) とチャーン数の関係が与えられる。

的にはエッジ状態がエネルギーバンドに縮退する点であたえられることとなる。エネルギーバンドの上端と下端からの寄与を少していねいに調べると下から j 番目のエネルギーバンドのチャーン数 c_j と j 番目と $j-1$ 番目のエッジ状態を与えるブロッホ関数のゼロ点の回転数の間に

$$c_j = I(C_j) - I(C_{j-1})$$

という関係式が成り立つことがわかる。(微積分の基本定理 $\int_a^b dx f'(x) = f(b) - f(a)$ のアナログ) によって ($I(C_0) = 0$ に注意して)

—— エッジとバルク ——

$$\begin{aligned} \sigma_{xy}^{j,\text{bulk}} &= -\frac{e^2}{h} \sum_{\ell=1}^j c_\ell = -\frac{e^2}{h} \sum_{\ell=1}^j (I(C_\ell) - I(C_{\ell-1})) \\ &= -\frac{e^2}{h} I(C_j) \\ &= \sigma_{xy}^{j,\text{edge}} \end{aligned}$$

すなわち二つのトポロジカルな整数は等しい。つまりホール伝導度はバルクで考えてもエッジで考えても等しいこととなる [19]。

紙面の制限で以下の節すべてを省略するので「2001 年度夏の学校」講義録、もしくは初貝ホームページ (<http://pothos.t.u-tokyo.ac.jp/hatsugai/>) 内の講義のページを参照されたい。

終わりに 以上時間の関係上省略した話題も多いが、磁場中の電子系の問題は、物性物理と数理的構造とのいくつかの意外な関係をみせてくれたことは伝えられたものと期待したい。歴史的にはこの問題に関して、もう調べ尽くされたと思えた時期も何度かあったがそのたびに新しい発見があり、驚きをとまなう興味深いブレイクスルーが何度もくりかえされてきたのである。私には、未だ明らかになっていない興味深い構造がまだそこにあるかのように思えるが、みなさんにとっては如何であろうか。

参考文献

- [1] K. V. Klitzing, G. Dorda, and M. Pepper, Phys. Rev. Lett. **45**, 494 (1980).
- [2] *The Quantum Hall Effect*, ed. R. E. Prange and S. M. Girvin, Springer-Verlag (1987).
- [3] *Quantum Hall Effect*, ed. M. Stone, World Scientific, (1992).
- [4] D. J. Thouless, *Topological Quantum Numbers in Nonrelativistic Physics*, World Scientific, (1998).
- [5] 初貝安弘、固体物理 **29**, 550-556 (1994).
- [6] Y. Hatsugai, J. Phys. C, Condens. Matter **9**, 2507-2549 (1997) (Review Article).
- [7] H. Aoki and T. Ando, Solid State Commun. **38**, 1079 (1981).
- [8] R. B. Laughlin, Phys. Rev. B **23**, 5632 (1981).
- [9] B. I. Halperin, Phys. Rev. B **25**, 2185 (1982).
- [10] See F. D. M. Haldane, in *The Quantum Hall Effect*, ed. R. E. Prange and S. M. Girvin, Springer-Verlag (1987).
- [11] J. Zak, Phys. Rev. **134**, A1602, 1607 (1964).
- [12] M. Ya. Azbel, Zh. Eksp. Teor. Fiz. **46**, 929 (1964) [Sov. Phys. - JETP **19**, 634, (1964)].
- [13] D. R. Hofstadter, Phys. Rev. B **14**, 2239 (1976).
- [14] G. H. Wannier, Phys. Status Solidi B **88**, 757 (1978); G. H. Wannier, G. M. Obemaier, and R. Ray, *ibid.* B **93**, 337 (1979).
- [15] P.G. Harper, Proc. Phys. Soc., London, Sect. A **68**, 874 (1955).
- [16] D. J. Thouless, M. Kohmoto, P. Nightingale, and M. den Nijs, Phys. Rev. Lett. **49**, 405 (1982).
- [17] M. Kohmoto, Ann. Phys. (N. Y.) **160**, 355 (1985).
- [18] Y. Hatsugai, Phys. Rev. B **48**, 11851 (1993).
- [19] Y. Hatsugai, Phys. Rev. Lett. **71**, 3697 (1993).
- [20] Y. Hatsugai, in *Quantum Coherence and Decoherence* ed. K. Fujikawa and, Y.A. Ono, 167 North-Holland (1996).
- [21] K. Hoshi and Y. Hatsugai, cond-mat/9908254, Phys. Rev. B **61**, 4409-4412 (2000).
- [22] M. Kohmoto, Phys. Rev. B **39**, 11943 (1989).
- [23] J. Avron, R. Seiler, and B. Simon, Phys. Rev. Lett. **51**, 51 (1983).
- [24] J. K. Jain, Phys. Rev. Lett. **63**, 199 (1989).
- [25] N. Byers and C. N. Yang, Phys. Rev. Lett. **7**, 46 (1961).
- [26] M. Toda, *Theory of Nonlinear Lattices*, Springer-Verlag (1981) and references therein.
- [27] D. Mumford, *Tata Lectures on Theta I, II*, Birkhäuser, Boston (1983).
- [28] E. Date and S. Tanaka, Prog. Theor. Phys. **55**, 457 (1976); Prog. Theor. Phys. Suppl. **59**, 107 (1976).
- [29] P. A. M. Dirac, Proc. R. Soc. A **133**, 60 (1931).
- [30] T. T. Wu and C. N. Yang, Phys. Rev. D **12**, 3845 (1975).
- [31] M. V. Berry, Proc. R. Soc. A **392**, 45 (1984).
- [32] *Geometric Phases in Physics*, ed. A. Shapere and F. Wilczek World Scientific (1989).
- [33] F. Wilczek, Phys. Rev. Lett. **48**, 1144, (1982).
- [34] Y. S. Wu, Phys. Rev. Lett. **52**, 2103, (1984).
- [35] *Fractional Statistics and Anyon Superconductivity*, ed. F. Wilczek, World Scientific, (1990).
- [36] Y. Aharonov and D. Bohm, Phys. Rev. **115**, 485 (1959).
- [37] B. I. Halperin, P.A. Lee, and N. Read, Phys. Rev. B **47**, 7312 (1993).
- [38] R. Laughlin, Phys. Rev. Lett. **60**, 2677, (1988).

- [39] Y.-H. Chen, F. Wilczek, E. Witten, B.I. Halperin, Int. J. Mod Phys. B3 1001 (1989).
- [40] F. D. M. Haldane, Phys. Rev. Lett. 67, 937, (1991).
- [41] Y. S. Wu, Phys. Rev. Lett. 73, 922, (1994).
- [42] P. B. Wiegmann and A. V. Zabrodin, Phys. Rev. Lett. 72 1890 (1994)
- [43] Y. Hatsugai, M. Kohmoto, and Y. S. Wu, Phys. Rev. Lett. 73 1134 (1994)
- [44] Y. Hatsugai, M. Kohmoto, and Y.-S. Wu Phys. Rev. B 53, 9697 (1996).
- [45] Q. Niu, D. J. Thouless, and Y. S. Wu, Phys. Rev. B 31,3372 (1985).
- [46] B. Douçot and P. C. E. Stamp, Phys. Rev. Lett. 66, 2503 (1991).
- [47] M. Takahashi, Y. Hatsugai, and M. Kohmoto J. Phys. Soc. Jpn. 65, 529 (1996).
- [48] R. Rammal, G. Thoulouse, M. T. Jaekel and B. I. Halperin, Phys. Rev. B27, 5142 (1983).
- [49] A. H. MacDonald, Phys. Rev. B 29, 6563 (1984).
- [50] A. H. MacDonald and P. Streda Phys. Rev. B 29, 1616 (1984).
- [51] X. G. Wen and A. Zee, Nucl. Phys. B 316, 641 (1989).
- [52] Y. Hatsugai and M. Kohmoto Phys. Rev. B 42, 8282 (1990).
- [53] Z. Tešanović, F. Axel, B.I. Halperin, Phys. Rev. B 39, 8525 (1989)
- [54] H. Kunz, Phys. Rev. Lett. 57, 1095 (1986);
- [55] D. J. Thouless, Phys. Rev. B 27, 6083 (1983);
- [56] A. H. MacDonald, Phys. Rev. B 28, 6713 (1983).
- [57] A. Widom, Phys. Lett. 90A, 474 (1982)
- [58] P. Strěda, J. Phys. C 15, L717 (1982).
- [59] X. G. Wen, F. Wilczek, and A. Zee, Phys. Rev. B 39, 11413 (1989).
- [60] Y. Hatsugai, M. Kohmoto, and Y.-S. Wu Phys. Rev. B 54, 4896 (1996).
- [61] G. S. Canright, S. M. Girvin, and A. Brass, Phys. Rev. Lett. 63, 2291 (1989).
- [62] X. G. Wen, E. Dagotto, and E. Fradkin, Phys. Rev. B 42, 6110 (1990).
- [63] Y. Hatsugai, M. Kohmoto, and Y.-S. Wu Phys. Rev. B 43, 2661 (1991).
- [64] S. Girvin and A. H. MacDonald Phys. Rev. Lett. 58, 1252 (1987).
- [65] D. Thouless, Phys. Rev. B 28, 4272 (1983).
- [66] Masahito Takahashi, Yasuhiro Hatsugai, and Mahito Kohmoto, J. Phys. Soc. Jpn., 65 529-537, (1996).
- [67] Y. Hatsugai, M. Kohmoto, and Y. S. Wu, Phys. Rev. B53, 9697-9712 (1996).
- [68] Y. Hatsugai and M. Kohmoto, Phys. Rev. B42, 8282 (1990).
- [69] Y. Hatsugai, M. Kohmoto, and Y. S. Wu, Phys. Rev. B54, 4898-4906 (1996).
- [70] 初貝安弘、物性理論とその数理、数理科学 1月号 32-38 (1996).
- [71] Y. Hatsugai, 180-183, in "Quasicrystal", ed. S. Takeuchi and T. Fujiwara, World Scientific, (1998).
- [72] Y. Hatsugai K. Ishibashi, and Y. Morita, Phys. Rev. Lett. 83,2246-2249(1999).
- [73] Y. Morita, K. Ishibashi and Y. Hatsugai, Phys. Rev. B1,5952 (2000).
- [74] Y. Hatsugai and Y. Morita, Physica B: Condensed Matter, Vol. 284, Part 2, July 2000, Pages 1724-1725 (2000)
- [75] Y. Morita and Y. Hatsugai, Phys. Rev. B2,9 (2000)
- [76] Y. Morita and Y. Hatsugai, Phys. Rev. Lett 86,51-1542001).